

外国人に対する唐王朝の政策

王 建新

皆さん、こんにちは。西北大学の王建新と申します。

2005年から専修大学では、井真成の墓誌の発見をきっかけにして、皆さんと一緒に古代東アジアの歴史や交流史について色々お話をしました。今日はまたここで新しく話題を刷新して、私個人は考古学者ですのでこの歴史の問題については文献を調べて、今日は文献の史料も含め考古学の資料も併せて、この問題についてお話しします。それでは話題に入ります。

今日、皆さんにお話したいことは、外国人に対する唐王朝の政策であり、まず井真成の墓誌から問題が出てきます。つまり、墓誌の中には、井真成が突然亡くなって、そのことを当時の唐王朝は非常に重視したということ。その葬式や亡くなった後に優遇的な取り扱いをしたということも墓誌の銘文から分かり、研究者にはとても注目されています。

これ（図1）が墓誌ですね。この墓誌の頃、開元22（734）年に36歳で井真成は亡くなりました。それを当時の玄宗皇帝が非常に悲しく思い、尚衣奉御という名誉官職を贈り、またその葬儀についても官費を出して埋葬した、と書いてあります（図2）。なぜ、一人の外国人留学生の井真成に対して、このような高い官位を贈ったのか、それが問題です。墓誌の銘文から見ると、井真成という人物は、才能も高く聡明で、遣唐留学生として選拔され唐王朝でも活躍したということが、高い待遇を受けた理由として書いてあります。それは理由の一つとして挙げられますが、もっと大きな面から見ると、その時代に唐王朝は外国人に対してどういう政策を採用したのか、それも考えなければなりません。それが今日、皆さんにお話したいことです。

一．唐に來た多くの外国人

唐王朝は、中国古代史上で一番栄えた王朝です。それだけではなく、唐王朝は外国人、外来の文化について、中国史上において後にも先にもないほど異例な政策をしました。それは非常に面白いところです。日本からの留学生・遣唐使や、新羅の留学生だけではなく、同時代に多くの外国人が唐に入ったのは、文献の史料からも、考古学の資料からも確実なことです。彼らが唐に入った理由としては色々ありますが、大きく分類すると、政治的な理由、宗教のため、商売のため、また留学のためという、四つに分類できると思います。他にも原因はあると思いますが、大き



図1 「井真成墓誌」の拓本写真

く分類すればこのようになります。

まず、政治的な理由で唐に入った外国人は、滅亡した国、あるいは部族の避難民であり、そこで一番多いのは、突厥人でした。突厥人はユーラシア大陸のなか、特に東アジア、中央アジアの中心地で、一度大きな草原帝国になりましたが、その後の内紛によって、東突厥、西突厥、北突厥などに分裂し、その中で一部分の突厥人が唐と親交を深め、唐に避難し、唐王朝に入ったということもよく見られます。その一つの例としては太宗の貞観9（635）年に、突厥人の阿史那社爾が、同じ血縁の突厥人の薛延陀に破れて、一万人ほどの部下を連れて入唐しました。その後も、突厥人が入唐した例が文献史料にみられる例は少なくありません。

もう一つはペルシア（波斯）人です。7世紀に入り、アラビア人の侵入によって当時のペルシアのササン朝が滅ばされました。ササン朝の王族をはじめとする貴族たち、また一般の人たちで唐に入った人も少なくありません。文献にもよく見られますし、考古学資料から見ても、ペルシア人の入唐も当時の重要なことと言えます。

政治的な理由として使節も挙げられます。使節の中には、一般の高官クラスの人たちや、スパイもありますし、その国の王様や王子、王族もよく見られます。日本、新羅からの遣唐使は勿論、中央アジア、南アジア、それから西アジア及びヨーロッパの諸国からも使節団がよく唐王朝に派遣されたことが文献からわかります。

まずインド（天竺）です。南アジアのインドからは、文献から見ると太宗の貞観15（641）年から、高宗、中宗、睿宗、玄宗の時代までだけで十数回の使節が唐に入ってきたという記録が見られます。インドと中国の間、ヒマラヤの麓にあるネパール（泥婆羅）という国も、太宗と高宗の時代に使節団を派遣したという記録が見られます。

またもう一つの国として、今のパキスタンとインドの間にある、カシミール地方のその当時の古い国（罽賓）が、唐の初めころ、高祖の武徳2（619）年から、太宗、高宗、中宗、玄宗、肅宗の時代まで、やはり数回の使節団を唐に派遣したことも文献に見られます。インド洋にある今のスリランカ、当時は獅子国と文献にはありますが、やはり高宗と玄宗時代に使節を派遣したという記録があります。

更に西方に位置する当時の東ローマ帝国も太宗、高宗、則天武后、玄宗の時代に何回か使節団を派遣しました。これは唐王朝としても非常に重要なことでした。後漢時代に班超を西域に派遣したとき、副使の甘英を当時のローマ帝国に派遣しようとした記録があります。今のシリアにあたるパルティアまで行ったのですが、当時のパルティアはシルクロード貿易の仲介を担当しており、中国とローマが直接の関係を築くことは商売の影響に良くないという考えから、「ローマは大きい海の手先でまだ遠いところですから」と甘英に告げ、結局甘英はローマには行きませんでした。ですから、唐の時代に直接東ローマと関係をもったということは、ユーラシア大陸の東と西の二つの大きな国ということからとても重要なことだと思います。

このような歴史は文献史料だけではなく、考古学の資料からも証明できます。皆さんご存じのように、唐の乾陵の陪葬墓の一つ、唐章懷太子墓の中の壁画ですね。その中で外交官の使節団の様子を壁画で見ることができます（図2）。

また、他の実物資料から見ると、唐の皇帝陵に並んでいる蕃酋像という丸彫りの石刻像があります。現在では太宗の昭陵でそれを見ることができます（図3～5）。また、乾陵には61の蕃酋像があることは、皆さんよくご存じだと思います。これは、昭陵の文献記録から見ると当初は14体の蕃酋像があったということがわかりますが、現在、14体までは発見されていません。しかし、この数年間の調査によって幾つか発見されました。これは蕃酋像の4つの台座の部分で、現在では像と台座が分かれておりどれが何の台座の上に立っているのか分かりませんが、台座の上に銘文があります（図4）。その中には高昌、突厥人、新疆の焉耆王のものがあり、文献の記録と対照することができます。また、台座の部分で今まで発見されていなかった新しい蕃酋像も何体か発見されました。乾陵にある61体の蕃酋像は、新しく一体発見されて62体



図2 唐章懷太子墓の壁画—客使図

になり、今このように並んでいます（図6）。昭陵と乾陵だけではなく、他の陵でも、この数年間の調査によって蕃酋像が発見されました。

睿宗、つまり玄宗皇帝の父親の橋陵では、蕃酋像を何体か、発掘調査によって発見しました（図7）。このような、頭がないものを何体か見つけました。玄宗皇帝の泰陵でもこのような蕃酋像が発見されました、まだ調査が終わってないのでまだ何体出てくるか分かりません（図8）。蕃酋像の服装から見ると、外国人だとはっきりわかる風体であると考えられます。次に肅宗、玄宗の息子、肅宗の建陵は、則天武后の乾陵とさほど遠くないところにあり、このような蕃酋像が何体もありました（図9）。特に、徳宗の崇陵では蕃酋像の台座と石像がたくさん発見されました（図10）。この台座は、ほぼ埋められたままの様子で並んでいます。ただし、蕃酋像はちょっと移動されて、1960年代に、当時の民衆たちによって別の場所から発掘され、一つのところに集中して埋められたということを彼らから聞き、今回の発掘によって、このように発見されました（図11）。蕃酋像は西と東の部分で分かれています。これは西の部分で8体。西の方が東の蕃酋像よりもっと多い。崇陵だけで十数体の蕃酋像が見つかりました。そして、文献を調べてみると、肅宗の時代に訪問した外国人と蕃酋像の数とはほぼ一致しています。また、宣宗の貞陵でも蕃酋像と台座を見つけました（図12・13）。敬宗の莊陵は山陵ではなく、墳丘がある皇帝陵です。そこでも蕃酋像が見つかりました（図14）。まだ全部の皇帝陵の完全な調査は終わっていませんが、おそらく、最初の高祖の献陵にはないかもしれません。

太宗の昭陵から後の時代の皇帝陵の全て蕃酋像が立っているのは、当時の陵園制度の一つとして考えられます。このことは、太宗の昭陵から蕃酋像の作成制度を始めたということを示し、おそらく、太宗の時代に唐に訪問した外国人の首領、王などの石像と思われます。文献では14人の蕃酋像を昭陵に立てるということが『唐会要』（卷二十、陵議本注）にも記録されています。最も数が多いのは則天武后と高宗の乾陵で、六十数体あります。これは、その時代の外国との交流が盛んであったということを象徴しています。また、崇陵の蕃酋像の数と文献の記録とを対照してみると、おそらく陵の蕃酋像の数は、一代の皇帝の在位中に訪問した外国人の首領の数と一致しており、その象徴であると考えられます。

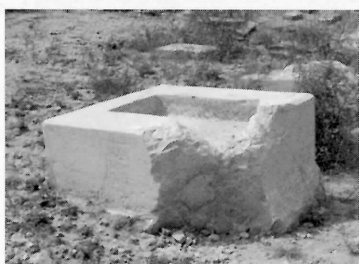
以上が、政治的な理由で唐に入った外国人についてです。



図3 太宗昭陵に発見した蕃酋像の台座



高昌王



薛延陀珍珠毗伽可汗



焉耆王

図4



図5 昭陵に発見した蕃酋像



図6 高宗と則天武后の乾陵に並んでいる蕃酋像



図7 睿宗橋陵に発見した蕃酋像

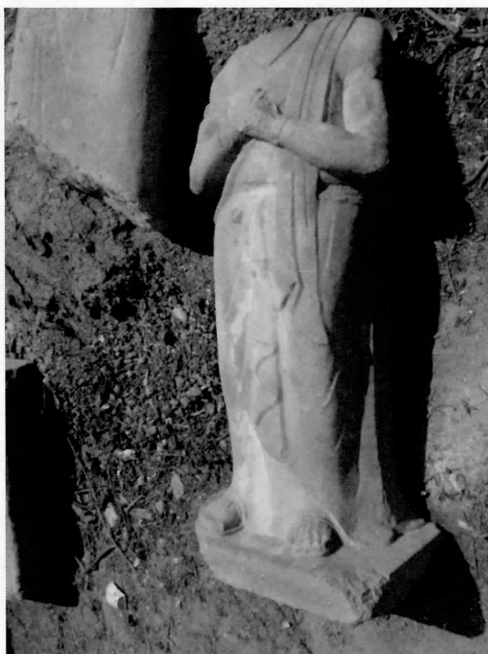


図8 玄宗泰陵に発見した蕃酋像

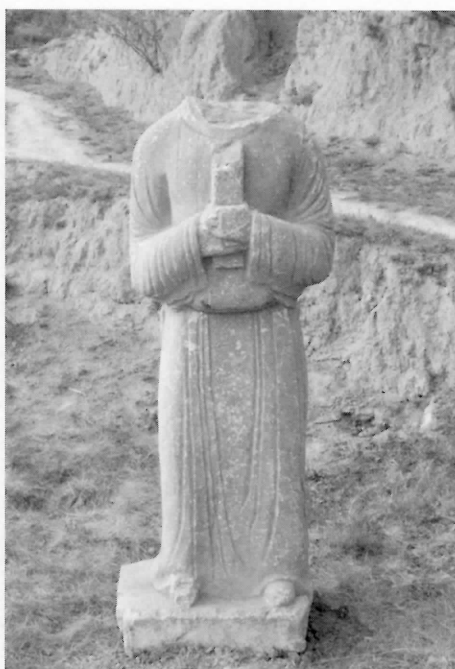


図9 肅宗建陵に発見した蕃酋像



図10 徳宗崇陵に発見した蕃酋像の台座



図11 徳宗崇陵に発見した蕃酋像



図12 宣宗貞陵の蕃酋像と台座



図13 貞陵の蕃酋像



図14 敬宗莊陵の蕃酋像と台座

